

授業の文法

さて、まずはお読みいただきましょう。

同じ内容を示す二つの文体です。

授業で発するならどちらの指示がいいですか？

どちらかを選び、またなぜそちらがいいかお考え下さい。

A 黒板をうつせるかな？

B 黒板をうつしなさい。

さて、どちらがいいのでしょうか。

少々回り道をしますが、私は昔から指導案の中に「発問」「指示」をそのまま書き込むスタイルを通してきました。

むろん、法則化からの影響を強く受けてのことです。

また、一言一句ゆるがせにしないその姿勢がいいと思っていました。

ですから、私の指導案には「ノートに書きなさい」というような指示が、そのままのりました。

ところが、新学力間が現場を席卷したときに、そのことを随分と責められた記憶があります。

私は、自分の意見を通すほど強くはありませんし、反論するほど勉強もしていませんでした。

しかし、今ならはっきり言えます。

上の例で言うならBが圧倒的にいいのです。

ちょっとでも、特別支援関係の本を読んだことのある方なら、Bを選ぶはずなのです。

例えば、お医者さんからの次のような指摘があります。

指示を出すときにも、疑問形での間接的な指示出し（例えば、「それができたら何をするのかな？」）ではなく、具体的な命令形で行う方が指示が通りやすい（例えば、「それが終わったら、 をやりなさい」）。

榊原洋一 『Dr.サカキハラのアDHDの医学』（学研）

なんとなく、「黒板をうつせるかな？」の方が柔らかいような気がするとか、「～しましょう」の方が、子どもの自主性を尊重しているなんていう言葉は、実際、もううんざりです。

そうした、「感じ」「雰囲気」「空気」とやらで教育方法を選ぶことで、どれだけ多くの子どもたちの学びが阻害されてきたのか。

教育の世界に科学を持ち込みましょう。

今こそ、科学、特に医学から学びましょう。

さらに、特に脳科学の進歩はめざましいのです。それから学ばない手はないのです。

授業の組み立て

さらに、榊原氏は前掲書でこうも言っています。

ADHAの子どもにとって、一時限の四五分は注意を持続するには長すぎる時間である。もちろんだからといって、ADHDの子どものために授業時間をもっと短くすることはできない。その代わりに、一時限をひと続きの連続したセッションで行わずに、細かく数コマのセッションに分け、短い課題を与えるようにする。

さて、学校には（教師によっては？）様々な授業の型があります。

「一時限をひと続きの連続したセッション」で行う授業とは、どのような授業の型でしょうか？

私は、例えば第一に算数科での問題解決型学習。

大きな課題を出して、一時間いっぱいだけ調べさせている平板な調べ学習。

調べたことを、ひたすら模造紙にまとめさせる総合。

こう見ていくと、結構ありますね。

ADHDの子に向いていない授業。

ところで私は、セッションという名前ではないですが、授業をいくつかの分節に分けて組み立てるという考え方を五年くらい前から持ち始めていました。

例えば、国語の授業の場合。

パーツ

ユニット1

音読

判読 連れ読み 一人読み ペア読み グループ読み 全体読み

ユニット2

読解

摘語 学習ゲーム（例えば「加」という漢字が出てきたら「カタカナでできている漢字をたくさん書きなさい」など） 人物 時制 対比 主題 事件 など

ユニット3

言語事項

フラッシュカード 漢字スキル 漢字テスト

こんなふうに、三つのユニット複数のパーツによって授業を構想していました。

こうすることで、授業を安定して組み立てることができるようになりました。

そして、子どもたちもこうした授業の組み立てになれてきます。

ワンパターンというかもしれませんが、子どもは意味ある繰り返しを好むのです。

3・7・30・90と「20」「150」リセットの法則

向山洋一氏が、黄金の三日間と名付けました。

学級の方向性を三日で示せという主張です。

最近、横浜の野中伸行氏がそれを発展させて、「3 教師とたのしくやっていけそうだというイメージを与える。7 学級のシステムを作る。30 作ったシステムを繰り返し定着させる。」という主張をしています。

あわせて北海道国語教育の雄、堀裕嗣氏はそれに「90」を加え、「三ヶ月間で授業のシステムを定着させよ」といいます。

なるほどどれも納得できる主張です。

しかし、「黄金の3日」に比べて、7・30・90はその利用性が低いように思います。

というのも、30や90はそのクラスの実態によって期間がまちまちであるように思うからです。

汎用性が低いような気がするのです。

私は、上記の主張に比して、一つの主張を試してみたいと思います。

それは、

「20(GW明け)・120(夏休み明け)」リセットの法則

です。

GWがあることを、教師は悲喜半々で受け止めます。

つまり、学年末以来疲れた体を休める為には喜ばしい。

しかし、せっかく教えたことがリセットされて子どもたちが帰ってくるので残念だ。

こうしたわけで悲喜半々といえます。

しかし、このリセットをマイナスに考えずにプラスに考えてみましょう。

というのは、GW明けが一学期最後の軌道修正のチャンスなのです。

20日間やってきました。

それで、成功事項だけならいいのですが、うまく機能していないシステムもあるはずなのです。

それを修正するのが、このGW明けです。

ここを逃したら、あとは学期末まで一気に行事が詰まっています。

大変な時期かと思いますが、学級経営の再点検をしましょう。

そして、GW明けは子どもたちにこういえばいいのです。

20日間やってきましたね。もっといいクラスになるために先生は休み中考えてきたよ。

を～～にしよう。

そうすれば、もっとみんなたのしくなるよ！